

あ し き さ ん じ ょう あと

国指定史跡 阿志岐山城跡



宮地岳上空から福岡平野を望む

平成11年(1999)3月21日、「古代山城研究会」のメンバーである中島聰さんは、筑紫野市^{みやざの}の東方に位置する宮地岳に登り山城遺跡の探索を行いました。これには一つの理由がありました。

7世紀後半、朝鮮半島西南部の白村江海戦^{はくそくのえ}での敗戦によってわが国は唐、新羅からの侵攻の危機にさらされました。これに備えるため天智4年(665)、大野城、基肄城を築いたのをかわきりに水城、小水城等を築造していきました。

中島さんはこれらの分布を見て、その配置が博多湾方面を主に意識したような配置になっており、その一方朝倉方面に抜ける豊後道沿いに防衛施設が見られないことから、大宰府東南方を守る未知の山城が存在するのではないかと推測しました。これが阿志岐山城発見の端緒となつたのです。中島さんによる探索によって列石遺構、水門遺構、城門遺構と推測されるものが見つかり、神籠石であることが明らかとなりました。

わが国における古代山城には朝鮮式山城と神籠石式山城(以下神籠石と言う)との二つの型式が知られています。阿志岐山城は後者の型式に属する山城です。この神籠石が学界に

紹介されたのは明治31年(1898)のことで、久留米市所在の式内社高良神社の境内にある神籠石が最初であり、これまでに16ヶ所が知られています。神籠石については明治末年から大正年間にかけての長期にわたって山城説と靈域説を巡って論争が展開されましたが結論は出ず、論争は次第に下火となっていきました。昭和35年(1960)、佐賀県武雄市において新たに「おつぼ山神籠石」が発見されました。昭和38年(1963)、九州大学の鏡山猛教授を団長として発掘調査が行われ、列石の背後に版築による土壘が発見され、かつて論議の的となった列石はこの土壘の土留めのための基礎石であることがあきらかになるとともに、列石前面は3メートル間隔で柱穴が検出されるなど、神籠石は山城であることが確実となりました。

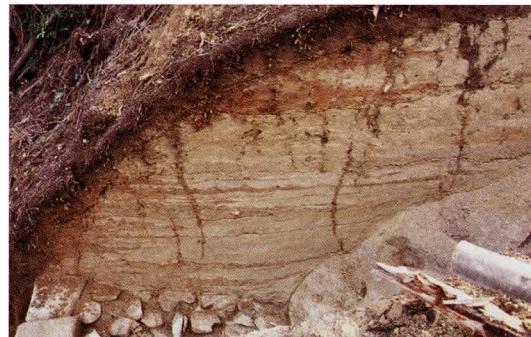
しかしながら、これらの神籠石は日本書紀等の古代文献に記載されておらず、その築造年代、築造主体あるいは朝鮮式山城との関連性などを考古学、文献史学においても未だに明確な解答が得られていません。そのような状況のなかで、阿志岐山城の存在が公表されてからは、従来研究が進められてきた大野城、水城などと関連付け、大宰府防衛の羅城を形成していたの

ではないかという論文も発表されました。

この遺跡発見の報をうけて、筑紫野市教育委員会では平成12年度から平成18年度にかけて確認調査を行い、その概要が明らかとなりました。阿志岐山城は標高338メートルの宮地岳の西北山腹から山頂にかけて築造されたと推定されますが、確認された土壘線は1.34キロメートルで確認できていない山頂部を含めると約3.68キロメートルに及ぶと推定されます。この山頂部において列石および土壘が確認できなかったことは、防御正面である平野に面した部分の工事を優先し、その半ばで築造が中止された結果なのか、本来築造されなかったかのどちらかであろうと考えられます。今回の発掘調査によって列石は随所で検出されていますが、その構造は過去に発掘調査された「おつぼ山」を始め各地の神籠石と同様の構造で、基部に直方体の切石を据え、その上部に版築と呼ばれる工法により土を突き固めて土壘を築いています。土壘線は北部九州に所在する神籠石が曲線をなしているのに対して、阿志岐山城はこれまで瀬戸内型といわれていた直線に並べた列石線を連続させていく「折れ構造」と呼ばれている型式をとっています。水門は平野に面した北側に2ヶ所、北東部に1ヶ所の計3ヶ所が明らかになっていますが、これらは谷部を塞ぐように設けられたもので、このうち第3水門と呼ばれている水門の規模が最も大きく見応えのある遺構です。この水門は東側の深い谷を塞ぐようにならって築造されたもので幅約23メートル、高さは中央部付近で3.8メートル程が残っています。石



第3水門全景



版築による土壘

材は直方体の切石で、大きいもので横2メートル、縦1メートルを超すものがあります。石材の積み上げに際して石材の一部を切り欠く「切り欠き技法」や石の上面を抉り込む「抉り込み技法」など北部九州の神籠石では余り見られない高度な技法が用いられていることが阿志岐山城の大きな特徴といえます。このほか城門跡ではないかと推測される地点も数か所指摘されていますが、明確な遺構は見つかっていません。これら土壘、水門などによって囲まれた城内の面積は約16ヘクタールと推定されますが、この城内については発掘調査はほとんど行われておらず、果たして建物跡などの遺構が存在するのか、今後の課題として残されています。ちなみに北部九州に所在するいずれの神籠石からも建物などの遺構は見つかっていません。このように、阿志岐山城跡は列石線の「折れ構造」や列石の加工技法に瀬戸内型に共通するものがあり、北部九州に存在する他の神籠石とは少し趣を異にしており、神籠石式山城研究の上において重要な山城といえます。

今回の発掘調査はあくまで確認調査であり、今後本格的な調査が行われる事が期待されます。

(石松好雄)

〈参考文献〉

『阿志岐城跡』 筑紫野市文化財調査報告書第92集
2008.3

『阿志岐城跡 II』 筑紫野市文化財調査報告書第104集
2011.3